

群馬県内小・中学校教師の「総合的な学習の時間」の成果と見直しに関する意識調査の結果と考察

調査概要

1 調査目的

群馬県内小・中学校における「総合的な学習の時間」の実施状況や成果と見直しに関する実態調査の基礎資料と質問項目の作成のために、事前の予備調査として、県内小・中・養護学校教師が、この時間の成果や見直しについてどのような意識を抱いているかを調査した。

2 調査内容

「総合的な学習の時間」で育てたい資質・能力、評価の観点、評価方法の設定に関すること

「総合的な学習の時間」の実施による児童生徒の学習成果と教師の教科等経営の質的な変化に関すること

「総合的な学習の時間」の見直しに関すること

3 調査対象

対象者：当センター研修員144名（長期研修員38名、特別研修員106名）

在籍、地籍校種内訳：小学校94名（内担外22名）、中学校49名、養護学校1名（中等部）

4 調査方法

質問紙法によるアンケート（選択肢及び、自由記述）

5 調査期日

平成15年6月4日（金）

群馬県総合教育センター 産業科学グループ
総合的な学習の時間 班
指導主事 高張 浩一 宮内 光一
武 倫夫 川島 一秀
長期研修員 清水 克則

調査結果と考察

1 学習内容として取り上げた主な課題

昨年度担当した学年の「総合的な学習の時間」に、学習活動としてどのような課題を主に取り上げたか質問した。

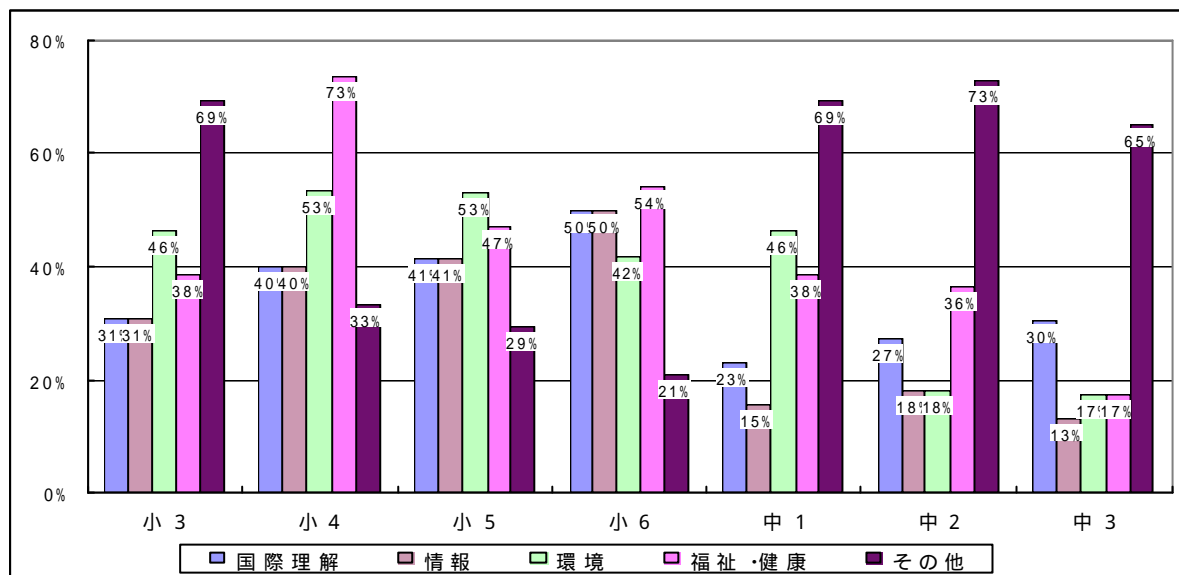


図1 学習内容として取り上げた主な課題 (複数回答)

(1) 結果

「国際理解」「情報」に関する課題を取り上げた教師の割合は、比較的小学校の方が高く、しかも学年が上がるにつれて増えている（小学校で約30～50%、中学校で約10～30%）。また、「環境」に関する課題を取り上げた教師の割合は、小3～中1で約40～50%であるのに対して、中2、中3では17～18%と低い。「福祉・健康」に関する課題を取り上げた教師は、中3担当で17%である他は、各学年とも約35%を超え、特に、小4で73%、小6で54%と割合が高い。「その他」の課題を取り上げた教師は、小3と中1～中3で約70%と割合が高い。

(2) 考察

小学校で、「情報」に関する学習活動が多いのは、情報機器の基本的な操作や活用の仕方の習得が図られたことによるものと思われる。「国際理解」に関しても、小学校の方が取り上げられた割合が高いが、これは、多くの小学校で英会話活動等が導入されたためと考えられる。また、体験的な活動が重視されていることから、小3～中1で、「環境」にかかわる自然体験や社会体験、「福祉・健康」にかかわるボランティアや社会体験、施設訪問、交流活動等を取り入れる傾向が多く見られた。

さらに、「その他」として記述された活動内容を見ると、小3～中1では、地域や郷土を題材とした調べ学習が多かった。このことから、この時間の学習内容や体験的な活動に、学校の特色や地域の特徴を生かそうとした様子がうかがえる。また、中2では、職場体験に関すること、中3では、進路に関することや個々の生徒の興味、関心に応じた課題を取り上げる様子が見られた。これは、これまでの学校行事や学年の活動をこの時間に生かそうとしたものと思われる。

2 「総合的な学習の時間」の見直しが必要と思う観点について

「総合的な学習の時間」における学校の全体計画を立てるに当たり、前年度の見直しが必要であると思う観点について質問した。

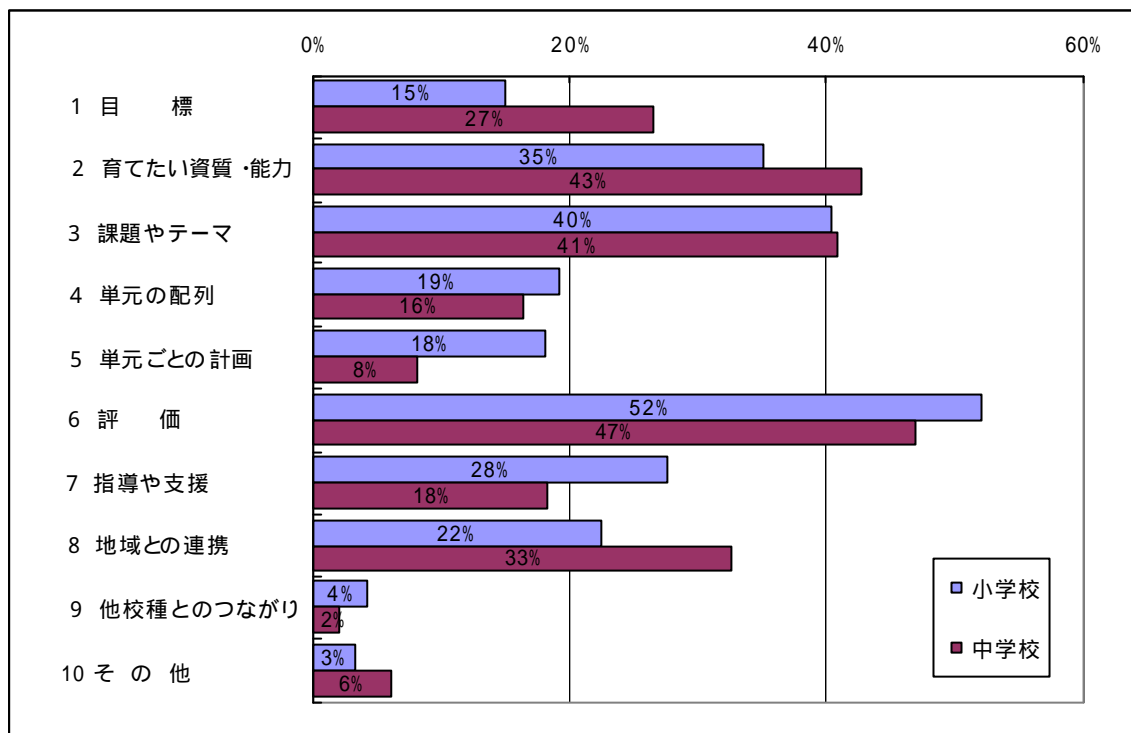


図2 「総合的な学習の時間」の見直しが必要と思う観点（複数回答）

(1) 結果

小・中学校とも「評価」に関する割合が最も高く（小52%、中47%）次いで、「課題やテーマ」に関する（小40%、中41%）「育てたい資質・能力」に関する（小35%、中43%）が挙げられている。逆に、「他校種とのつながり」に関するについて見直しが必要であるという回答は、小学校4%、中学校2%とかなり低かった。

(2) 考察

昨年度、初めてこの時間の総括評価として、通知票や指導要録の記入が行われた。そのため「評価」についての関心が高かったものと思われる。児童生徒に何が身に付いたのかを見取るためには、この時間でどんな力を育てたいのかを明確にして指導していかなければならない。この時間の目標や育てたい資質・能力に基づいて評価の観点や評価規準を設定し、目標達成のためにどのような学習内容や課題を取り上げるか十分に吟味する必要がある。そのため、「評価」に次いで「育てたい資質・能力」「課題やテーマ」についての見直しが必要であると多くの教師が意識したものと考えられる。

3 育てたい資質・能力について

(1) 育てたい資質・能力の設定

各校では、「総合的な学習の時間」において、児童生徒にどのような資質・能力を育てたいとしているか質問した。

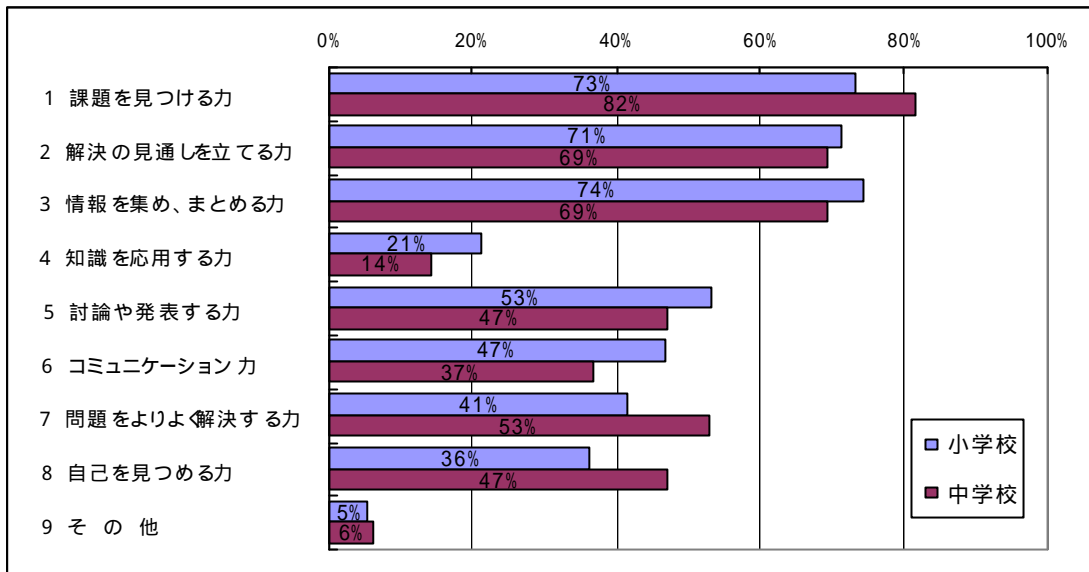


図3 「総合的な学習の時間」で育てたい資質・能力（複数回答）

結果

小・中学校とも回答の割合が高かった項目は、「課題を見つける力」(小73%、中82%)「解決の見通しを立てる力」(小71%、中69%)「情報を集め、まとめる力」(小74%、中69%)である。逆に、割合が低かったのは、「知識を応用する力」(小21%、中14%)であった。

考察

「総合的な学習の時間」においては、問題解決的な学習の進め方が重視されている。児童生徒が主体的、意欲的に学習を進めていくためには、自己の内から発する切実な思いをもって課題と向き合い、自分なりに解決の見通しを立てたり、解決に必要な情報を集め、まとめたりする力が必要となってくる。このため、小・中学校とも「課題を見つける力」や「解決の見通しを立てる力」「情報を集め、まとめる力」の育成に重点が置かれたものと思われる。

(2) 育てたい資質・能力の設定で基にしたもの

次に、育てたい資質・能力を設定するのに、主に何に基づいて具体化したか質問した。

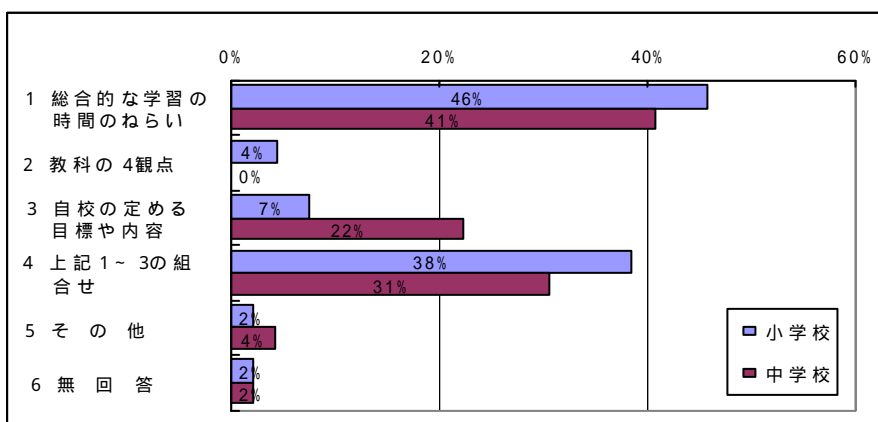


図4 「総合的な学習の時間」における育てたい資質・能力の設定で基にしたもの（複数回答）

結果

「総合的な学習の時間のねらい」に基づいて具体化したという回答が、小学校で46%、中学校で41%あり、「総合的な学習の時間のねらいと教科の4観点、自校の定める目標や内容」を組み合わせ設定したという回答が、小学校で38%、中学校で31%あった。また、「自校で定める目標や内容」に基づいて設定したという回答では、小学校7%、中学校22%と差が見られた。

考察

育てたい資質・能力の設定に際してこのような傾向が見られたのは、各学校の実態の違いや特色のあらわれと考えられる。特に、小学校に比べ中学校において「自校の定める目標や内容」に基づいて設定された割合が高いのは、学校の特色や独自性を一層あらわそうとしたためと思われる。

4 評価の観点の設定について

「総合的な学習の時間」において、どのような評価の観点を設定しているか質問した。

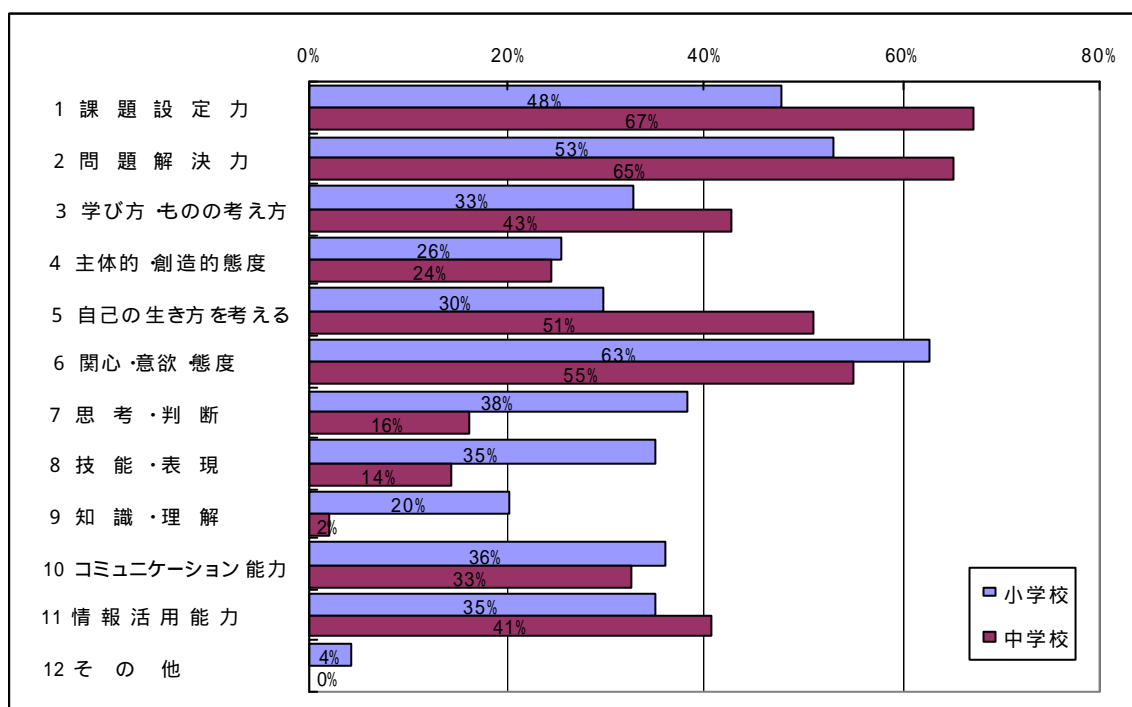


図5 「総合的な学習の時間」における評価の観点（複数回答）

(1) 結果

小学校では、「関心・意欲・態度」が63%と最も割合が高く、次いで、「問題解決力」が53%、「課題設定力」が48%の回答があった。また、中学校に比べて教科と同様の観点を設定している傾向が見られ、「思考・判断」が小38%、中16%、「技能・表現」が小35%、中14%、「知識・理解」が小20%、中2%と、差が大きく見られた。

中学校では、「課題設定力」が67%「問題解決力」が65%と割合が高く、次いで「関心・意欲・態度」が55%となっている。特に、「自己の生き方を考える」を挙げた回答は51%で、小学校が30%であったのに比べるとかなり割合が高くなっている。

(2) 考察

これら評価の観点、先の育てたい資質・能力と関連して設定されていることが分かり、「課題設定力」や「問題解決力」、学習や対象への「関心・意欲・態度」の育成に一層重点が置かれている様子が見えてくる。また、小学校に比べて中学校の方が「自己の生き方を考える」を観点に設定している割合が高く、これは発達段階に応じたものと考えられる。

5 評価方法について

「総合的な学習の時間」で、どのような評価方法を取り入れているか質問した。

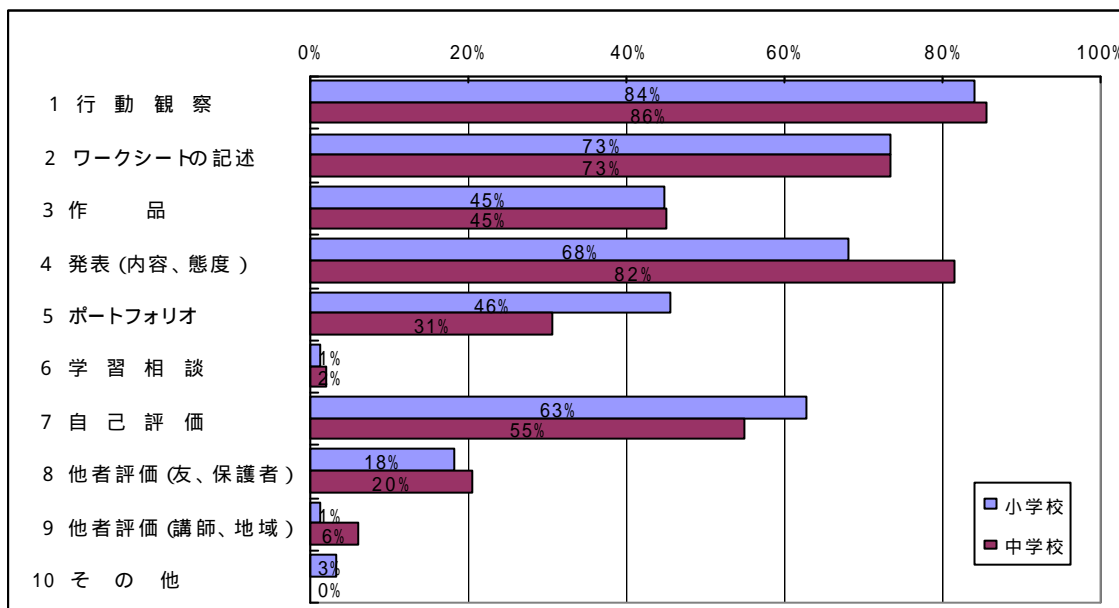


図6 「総合的な学習の時間」における評価方法（複数回答）

(1) 結果

小・中学校とも回答の割合が高かったのは、「行動観察」(小84%、中86%)「ワークシートの記述」(小73%、中73%)「発表(内容、態度)」(小68%、中82%)「自己評価」(小63%、中55%)等の方法であった。逆に、割合が低かったのは、「学習相談」(小1%、中2%)「他者評価(外部講師、地域の人々)」(小1%、中6%)であった。

(2) 考察

「総合的な学習の時間」における学習の成果としては、量的なものだけでなく、質的な変容や高まりが重要視されている。児童生徒が身に付けた資質・能力がどのように行動や態度となってあらわれているのかしっかりと見取っていく必要があり、「行動観察」や「ワークシートの記述」、「発表」等の評価方法が多く取り入れられていることが分かる。また、児童生徒自身にも自己の変容や成長した姿に気付かせることが大切であることから、「自己評価」や「ポートフォリオ」が取り入れられている。

一方、「学習相談」の割合が低かったのは、「自己評価」や「ポートフォリオ」「ワークシート」に教師からのコメントが書かれたり、適宜、個別に指導や助言が行われているからであろうか。外部講師や地域の人々による評価がほとんど取り入れられていないことと合わせて、評価の改善、充実に向けた課題の一つと言えよう。

6 学習の成果としての児童生徒に「身に付いた資質・能力」について 学習成果として、「育てたい資質・能力」が児童生徒に身に付いたと思うか質問した。

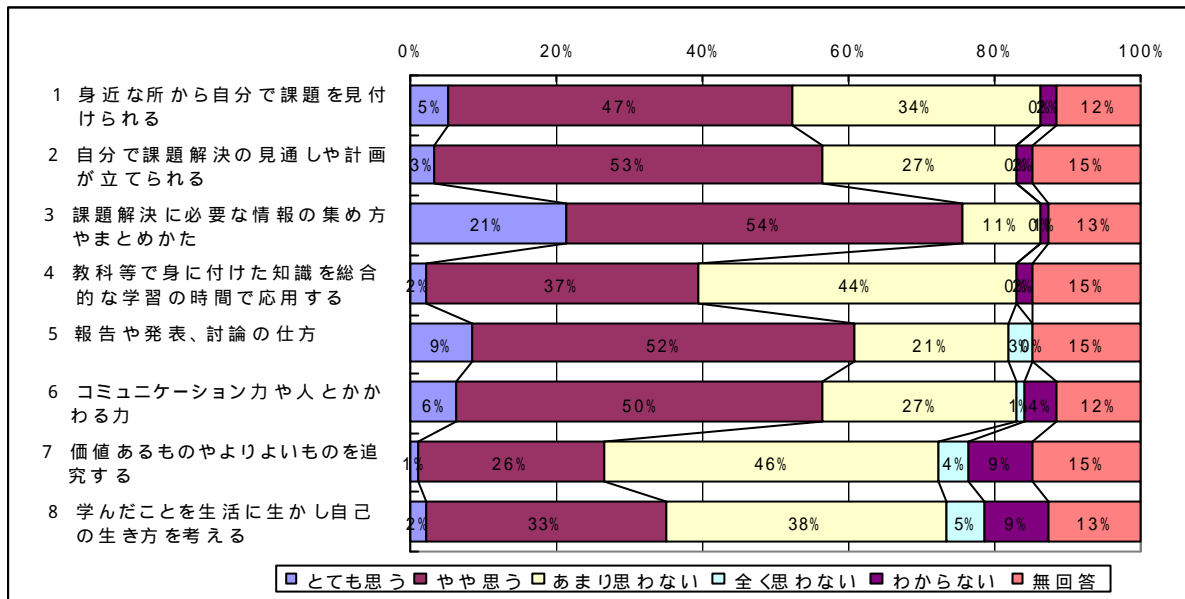


図7 「総合的な学習の時間」で育てたい資質・能力が児童に身に付いたと思うか（小学校）

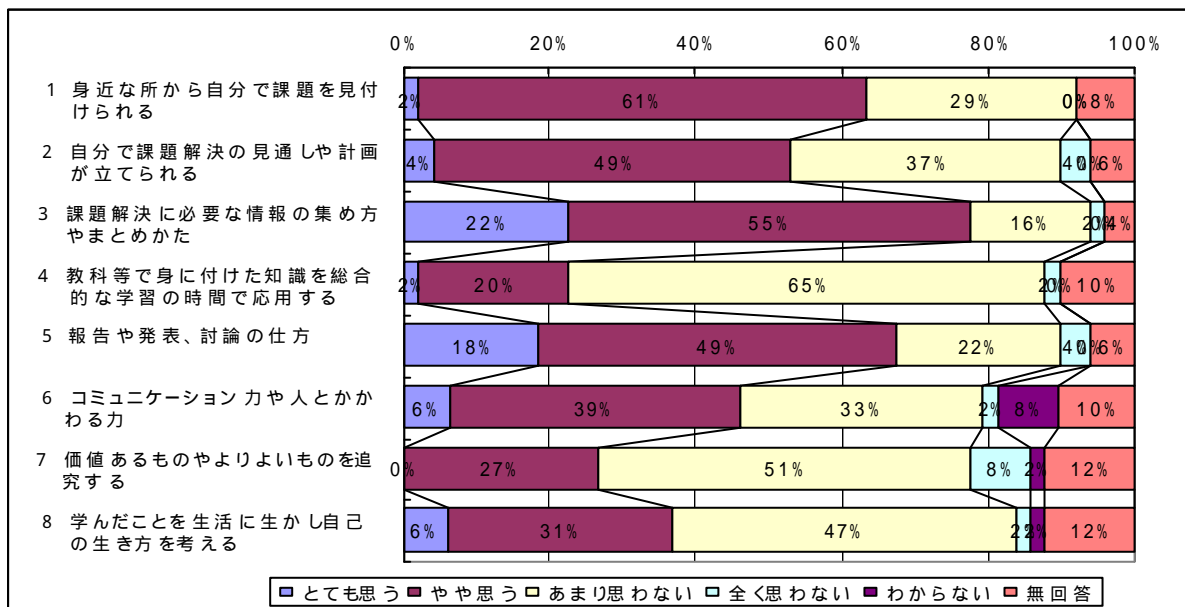


図8 「総合的な学習の時間」で育てたい資質・能力が生徒に身に付いたと思うか（中学校）

(1) 結果

「とても思う」「やや思う」を合わせた回答が60%を超えた項目は、「課題解決に必要な情報の集め方やまとめかた」（小75%、中77%）「報告や発表、討論の仕方」（小61%、中67%）「身近なところから自分で課題を見付けられる」（中63%）であった。

一方、「あまり思わない」「全く思わない」の回答が多かった項目は、小・中学校とも「教科等で身に付けた知識を応用する」（小44%、中67%）「価値あるものやよりよいものを追究する」（小50%、中59%）「学んだことを生活に生かし自己の生き方を考える」（小43%、中49%）の資質や態度にかかわることであった。

(2) 考察

「情報の集め方やまとめ方」は、育てたい資質・能力の設定でも割合が高く、児童生徒によく身に付いていると判断した教師が多いということから、効果的に指導が行われた様子がうかがえる。また、「総合的な学習の時間」では、発表会やプレゼンテーションが学習過程に組み込まれることが多く、こうした機会によって「報告や発表、討論の仕方」が着実に児童生徒に身に付いてきていることが分かる。

しかし、「知識を応用する」や「よりよいものを追究する」等の思考力や判断力、資質や態度は、すぐに身に付いて行動にあらわれるというものではなく、また、身に付いたかどうか見取るのもなかなか容易ではない。そのため、全体の傾向としては、身に付いているかどうか判断しにくかったものと思われる。

7 波及効果としての教師間の教科等経営の変化について

「総合的な学習の時間」の実施による波及効果として、教師の教科等経営にどのような質的な変化が見られるようになったか質問した。

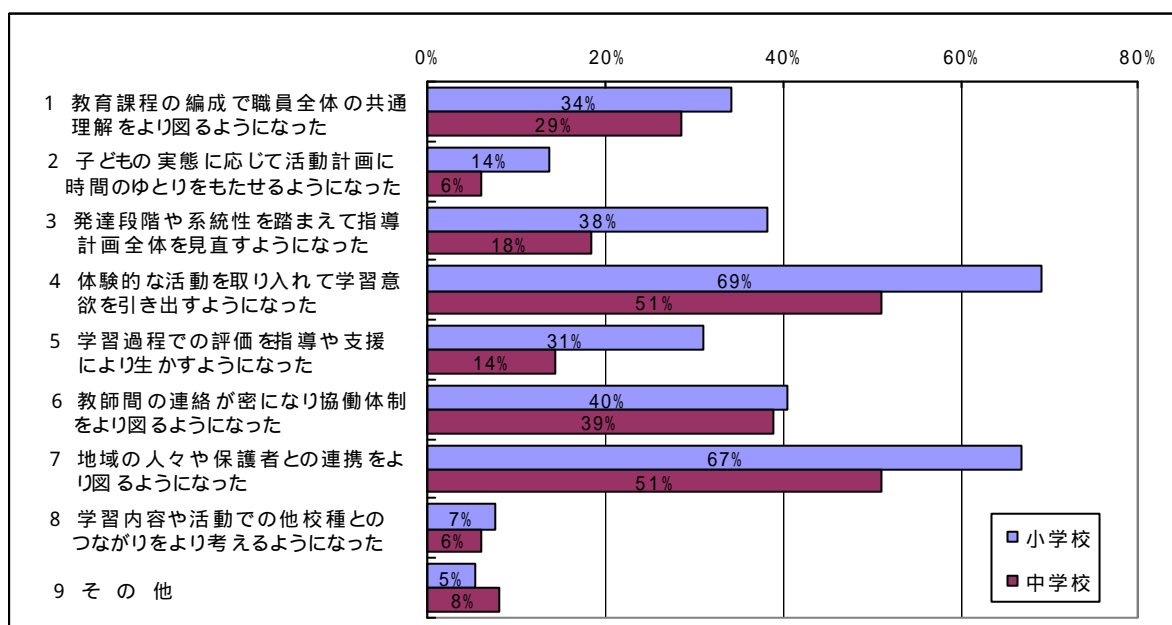


図9 「総合的な学習の時間」の実施による教科等経営の変化（複数回答）

(1) 結果

回答の割合が高かったのは、「体験的な活動を取り入れて児童生徒の学習意欲を引き出すようになった」(小69%、中51%)「地域の人々や保護者との連携をより図るようになった」(小67%、中52%)「教師間の連絡が密になり協働体制をより図るようになった」(小40%、中39%)であった。一方、回答の割合が低かったのは、「子どもの実態に応じて活動計画に時間のゆとりをもたせるようになった」(小14%、中6%)「学習内容や活動での他校種とのつながりをより考えるようになった」(小7%、中6%)「学習過程での評価を指導や支援により生かすようになった」(小31%、中14%)であった。

(2) 考察

体験的な学習活動は、児童生徒の興味、関心を引き出し、学習意欲を高めるのに効果

的である。「総合的な学習の時間」では、保護者や地域の人々の協力により自然体験や社会体験等の学習活動が多く行われている。こうした機会が、教科等の学習にも多く取り入れられてきている様子が見えてくる。また、「総合的な学習の時間」においては、カリキュラムの開発や単元の計画、実施、評価、改善等、全教職員による共通理解や協働体制を図ることが必要となってくる。こうした取組は、教科等の経営改善にもよい影響をもたらしており、教師間の連携や協働体制がより図られてきたことが分かる。

8 「総合的な学習の時間」の見直しについて

今年度の「総合的な学習の時間」の計画を立てるに当たり、昨年度の見直しが学校全体で十分に行われたと思うかどうか質問した。

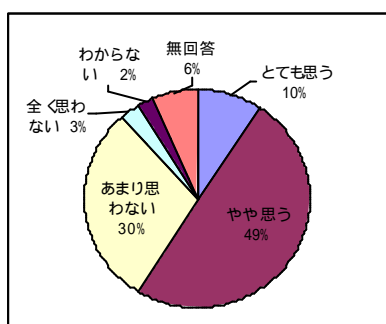


図10 「総合的な学習の時間」に見直しが十分に行われたと思うか（小学校）

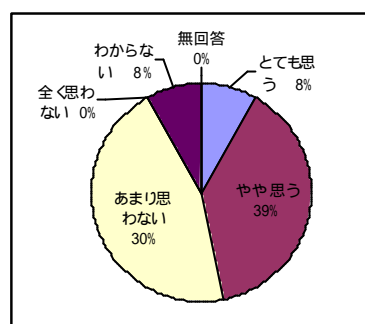


図11 「総合的な学習の時間」に見直しが十分に行われたと思うか（中学校）

(1) 結果

小学校では、「とても思う」「やや思う」を合わせた回答が59%で、中学校では、47%であった。また、「あまり思わない」「全く思わない」「わからない」と回答した割合を合わせると、小学校で35%、中学校で53%であった。小学校に比べ中学校では、見直しが十分でないと思う教師の割合が高いことが分かる。

さらに、見直しが十分に行われたとは「あまり思わない」「全く思わない」「わからない」と回答した教師に、その理由について質問した。

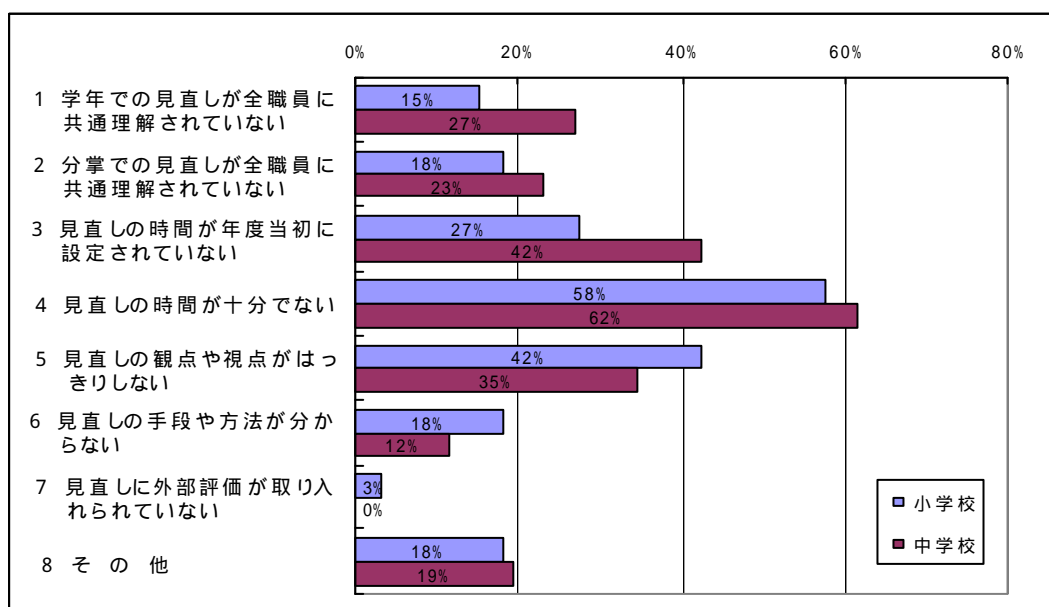


図12 「総合的な学習の時間」の見直しが十分でないと思う理由（複数回答）

小・中学校とも「見直しの時間が十分でない」と回答した割合が最も高い(小58%、中62%)。次いで、「見直しの観点や視点がはっきりしない」(小42%、中35%)「見直しの時間が年度当初に設定されていない」(小27%、中42%)という回答が多く見られた。

(2) 考察

次年度のカリキュラムを計画するに当たり、年度末に見直しの時間を十分に確保することは、小・中学校ともなかなか難しい様子がうかがえる。また、「見直しのための時間が年度当初から設定されていない」ことが、カリキュラムを見直し、改善するだけの時間を十分にとれない原因にもなっていると考えられる。さらに、カリキュラム評価を行うためには、観点や視点が明確になっていることが大切である。見直しの観点や視点が不明であれば、評価を行うことは難しいと言える。

まとめ及び本調査に向けて

目標や内容、評価の観点との整合性が図られているか

「総合的な学習の時間」の改善に向け、見直しの必要がある観点として、「評価」「育てたい資質・能力」「課題やテーマ」に関するが多く挙げられていた。先に触れたように、評価をしようにもその対象となる学習目標や指導のねらいが定まっていなければ、適切な評価を行うことはできない。ましてや、児童生徒にどのような資質や能力を身に付けさせるのが具体化されていなければ、児童生徒にとって価値や意味のある課題やテーマ(学習内容)を設定し指導することはできない。自校の「総合的な学習の時間」の目標や学習内容、評価の観点や規準、方法等、整合性が図られているか、改めて点検していくことが大切である。

本調査では、このことに関する各学校の取組や実施状況の傾向をつかむことにする。

「育てたい資質・能力」と教科等との関連、他校種間のつながりが図られているか

「総合的な学習の時間」では、教科等で身に付けた知識や技能、学び方等、基礎・基本を生かしたり応用したりして学習を進めることが大切である。児童生徒は、各教科等で培われたものの見方や考え方、知識、学び方や技能を駆使して、目の前の問題や課題をよりよく解決していく。そこには、それまでの経験を踏まえた判断力や創造力が働き、新たな意欲や挑戦心がわいてくる。また、「育てたい資質・能力」が、児童生徒の発達段階に応じて設定され、小中高の連携が図られることにより、「確かな学力」として児童生徒に身に付いていく。

「総合的な学習の時間」における育てたい資質・能力や学習内容が、教科等の基礎・基本と関連して設定されているかどうか、他校種とのつながりが図られているかどうか、本調査で実態を把握しておきたい。

指導と評価の一体化、及び授業改善に生かす評価が図られているか

児童生徒の「関心・意欲」や「思考・判断」などの見えない学力を評価したり自己評価力を高めたりするのに、ポートフォリオ評価は有効であり、学習相談等による個に応じた指導と評価を取り入れることによって、より効果が上がる。また、外部協力者からの評価も児童生徒の学習意欲を高め、自信をもたせることにつながる。さらに、評価活動を指導の改善や活動計画の修正、あるいはカリキュラム全体の見直しに生かすことによって、この時間の充実が一層図られるものとする。

このことは、「総合的な学習の時間」における評価だけに限ったことではないが、この時間の評価をどのように生かしているか、本調査の質問項目の一つにしたい。

